Fuji Women's University

藤女子大学人間生活学部紀要，第 50 号：11-24．平成 25 年．
The Bulletin of The Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, No. 50: 11-24. 2013.

メドヴェージェフ兄弟による「原子力収容所 Atomic Gulag」認識の舞台裏

── ジョレス＆ロイ共著『回想 Из Воспоминаний (Memoirs) 1925-2010』によせて ──

佐々木　　洋

Abstract

I have long wanted to know how and why the Medvedev brothers were able to write their well-known works, such as The Rise and Fall of Lysenko (1969) by Zhores, or Let History Judge (1970) by Roy. These works were initially only distributed as samizdat copies among rather small dissident groups, during the former USSR era, and they seldom gave enough information sources. The brothers' recent book; Memoirs 1925-2010 [Iz Vospominnanii 1925-2010] (2010); of which the Japanese version was published last November, includes the authorities and witnesses for their early works, which they were never able to disclose under the KGB suppressing system. The brothers also share with us a great deal of interesting information from that period, especially on unknown exchanges between Zhores & Roy Medvedev brothers and writers, editors, scientists and artists who were famous in 1960s and 1970s.

Finally, I try to explain the background for the concept of 'Atomic Gulag', which they originally set out in their book; Unknown Stalin (2001), in particular, I focus on who and what were the major influences on the twin brothers as they developed this concept.

1　はじめに

このほど、旧ソ連異論派[1] の数少ない生き残り、ジョレス＆ロイ・メドヴェージェフが満 85 歳の記念に著した『Из Воспоминаний 1925-2010』の邦訳版『回想 1925－2010』（現代思潮新社）を共訳した[2]。

ジョレス＆ロイ・メドヴェージェフの双子兄弟は、20 世紀の世界史を揺るがした旧ソ連体制の、外からは容易に窺がえない科学や政治や社会の軋轢と病理を、その歴史と構造の深部から解き明かし、世界の言論界に一石を投じてきた科学者（兄ジョレス）および歴史家（弟ロイ）として知られる。

内外の識者が承知する旧ソ連社会の実相に関する理解には、その実、ジョレスの『ルイセンコ学説の興亡』やロイの『歴史の審判にむけて（邦訳名「共産主義とは何か」）』の所説に由来するものが少なくない。二著は、旧ソ連では発禁の書であり、サミズダート＝地下出版物として異論派とその周辺で回覧されていたに過ぎない。そこでは、典拠となる史資料や取材源、閲覧したコレクション、協力者の支援などが十分開示されない場合があった。開示することにリスクが伴うことがあったからである。

1960 年代～80 年代の二人の作品に関して、当時は公表できなかった典拠や取材源、コレクションの提供者など、兄弟の言論活動の舞台裏が、『回想 1925－2010』でかなりまとまって浮き彫りにされている。

本書は、ジョレス＆ロイ兄弟が、コリマの強制収容所で死んだ父の追憶、自らの人格と思想の形成、科学者・歴史家としての試練、異論派としての独自スタンスの確立、多くの作家・科学者・芸術家らと

Yoh SASAKI　札幌学院大学総合研究所客員研究員・藤女子大学人間生活学部人間生活学科非常勤講師

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

の交渉を跡づけた論考集である。本書により、私たちは、二人が、スターリン時代からソ連崩壊を経て、プーチン時代の現在まで、軸足のぶれない歴史観を示し続けえた経緯を、他の異論派とのスタンスの分岐を含め、辿ることができる。しかも興味深いことに、兄弟の著作が、名もない人々が、また、当時、名を明かせなかった人々が、二人の筆に託して世に問うたものを含むことをも知ることができる。

そこで本稿は、『回想 1925－2010』を素材とし、二人の一連の著作活動の舞台裏を探索してみたい。

この舞台裏の探索から、第一に、本書で初めて明らかとなる取材源や、閲覧しえた蔵書類の存在がある。第二に、異論派とその周辺で核物理学者や作家、芸術家らの交流を媒介した兄弟の位置が見えてくるが、興味深いのはそこに 1957 年の『ウラルの核惨事』が絡んでいることだ。第三に、一卵性の双子兄弟ながら、二人が驚くほど異なる個性をもち、また、そのこと自体に意味があることにも注目したい。

兄弟は本年満 87 歳と高齢であるが、なお世界に発信し続ける現役の著作家である。本稿では結びに代えて、兄弟が、旧ソ連の崩壊に伴う、核開発関連資料の一部機密解除を受けて炙り出した、「原子力収容所 Atomic Gulag」の認識について、３•11 福島事故を招いた、「核の安全神話」とその背景を検討する際のキーワードの一つと見る立場を提起した。

2　現役の著作家として

2-1　３・11 福島原発震災は人類史の分水嶺；「原子力収容所 Atomic Gulag」認識の射程

米原万里の絶筆『打ちのめされるようなすごい本』が「この双子兄弟ほど意気軒昂で頭脳明晰なおじいちゃんは珍しい」「二人の書くものはどれも、掛け値なしに面白い」[3] と評したのは共著『知られざるスターリン』（現代思潮新社、2003）のことだった。米原が驚嘆したように兄弟は現役の著作家である。

一昨年の３・11 福島事故後にロンドン在住のジョレスから届いた私信に被災者への見舞い文があり、そこには “The world is probably near of the turning point of the human history.” のくだりがあった。

福島事故は恐らく人類史の岐路となろうと示唆する歴史観は、メドヴェージェフ兄弟が『知られざるスターリン』で炙り出した「原子力収容所 Atomic Gulag」認識の延長線上にある。

『知られざるスターリン』第三部第三章「スターリンと原子力収容所」は、ソルジェニーツィンのいう『収容所群島』とは、実は原水爆の開発を猛進する「原子力収容所 Atomic Gulag」の群島のことだとして、刑期の終えた囚人までを永久凍土のマガダン等に口封じしてきたこの収容所 Gulag の全体像を炙り出し、ソ連崩壊までベールに包まれてきた、スターリンの「核開発収容所群島」が、依然、私たちが生きる、「核の時代」としての現代を制約しているとの歴史認識を呈示している[4]。兄弟は、米国の核独占と核優位、それを打破しようとするスターリンの「原子力収容所」、こうした米ソの熾烈な核軍拡競争が、「核の安全神話」を必要とする最も強力な規定要因となり、さらには、こうして造られる「安全神話」の呪縛こそが、チェルノブイリと福島の事故をも根底において規定していた、と示唆しているのではないか。筆者はそう受けとめ、この間、ジョレスとの意見交換を試みてきた。

そうした認識に、３•11 事故を踏まえた改訂版、吉岡斉著『新版　原子力の社会史』（2011）が求める「歴史の検証」[5] に、呼応するものがあると思えたからである。

2-2　『回想 1925－2010』（2010）と前共著『ソルジェニーツィンとサハロフ』（2005）の関係

最近著の『回想 1925－2010』は、今世紀入り以後にまとめたものでは、『知られざるスターリン』と『ソルジェニーツィンとサハロフ』[6] に続く、３番目の共著である。

共著『知られざるスターリン』は、ソ連崩壊後の党•国家文書庫の一部機密解除に伴い、「ソ連が世界史に提起したものは何であったか」という問いに客観的な評価が可能となったもとで、二人が「学問としての歴史学を復権させる」意図のもとに、「途方もない意志力をもち、試行錯誤を重ねる、仕事の虫の、かなりの知性を備えた」、これまで照射されることのなかった、こうしたスターリン像の「知られざる」諸側面について[7]、新たな形象を試みた興味あふれる研究書である。筆者自身は、この書の第二部「スターリンと核兵器」の三章「スターリンと原子爆弾」「スターリンと水爆」「スターリンと原子力収容所」

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

に、とりわけ「スターリンと原子力収容所」の剔出に強い衝撃を受けた。

前共著の『ソルジェニーツィンとサハロフ』は、後世、反体制運動の時代と称されるようになる、1960年代〜1980年代の、ソ連における異議申し立て運動の積極的な参加者であった兄弟が、やはり、この時代の異論派運動の代表格であった、ソルジェニーツィンとサハロフとの、「トリプルな関係」に関する二人の論考を中心に、編集し取りまとめたものである。ソ連の異論派活動、あるいは反体制民主化運動の代表的存在と目された四人の、いわば「三つ巴」の連携と、その後の捻じれを扱った論考集とみてよい。

これに対し、『回想 1925－2010』は、「日本語版への補遺」である第三部を除けば、第一部が「幼年期と青年期　1925－1953」、第二部が「ソ連邦から新生ロシアへ　1953－2010」とあるように、青年期までの人格形成と、成人期以降の生き方および、様々な傾向の異論派を受けとめる二人の座標軸に関する論考を収録対象としている。したがって、本書の原著には、ソルジェニーツィンとサハロフとのスタンスの違いを論じた、「トリプルな関係」にかかわる論考の多くがやはり、収められている。すなわち、『回想 1925－2010』と『ソルジェニーツィンとサハロフ』のそれぞれの原著には、「三つ巴」に関する諸論考が重複して収められる結果となっていた。そこで今回、訳出を担当した我われは、この重複を避けるため、ジョレス稿「ソルジェニーツィンとのオブニンスクでの最初の出会い」とロイ稿「サハロフとの出会い」の各一篇を除き『回想 1925－2010』邦訳版に再掲しなかった。再掲したジョレス稿には、彼の1957年の知られざるウラル核惨事の掘り起しと、闇に埋もれていた「原子力収容所」の炙り出しとに極めて重要な証言を与えた往年の囚人研究者であり、世界的に著名な放射線遺伝学者のニコライ・ティモフェーエフ＝レソフスキーが、ソルジェニーツィンのブトゥイルカ監獄での元同房者として登場する。この遺伝学者は、オブニンスクの放射線医学研究所における、ジョレスの直接の上司でもあった。

再掲したロイ稿では、「水爆の父」＝サハロフの驚くほどお粗末な放射能の危険性認識が話題になる。サハロフは自らの核実験で被爆している[8]。旧ソ連の核開発当局の元責任者たちが、「原子力収容所」の極めて杜撰な核管理の実態を公に語り始めたのは、ようやく1990年代の半ば以降のことだった[9]。ちなみに、中ソ蜜月時代に中国に原子力開発を伝授したのもソ連の「原子力収容所」の指導者たちであった。

2-3 『回想 1925－2010』日本語版の構成

今回の『回想 1925－2010』日本語版は全三部からなる。

第一部の「幼年期と青年期 1925－1953」は、スターリンに父を奪われた衝撃が、兄弟の生き方をいかに大きく運命づけたかを綴った第一章「両親の思い出」と、後にルイセンコ論争の渦中の人物となるジョレスが、独ソ戦で負傷・退役後、ティミリャーゼフ農科大学で学位を得るまでの青年期を綴った第二章「危険な仕事」からなるが、後者では、学部学生のジョレスが、農業アカデミー総裁のルイセンコに自説論文を送付し、総裁室に招かれたという意外なエピソードも紹介されている。

日本語版『回想 1925－2010』の大宗をなす第二部は、ジョレスとロイとの、作家や編集者、科学者、芸術家らの、実に多彩な異論派とその周辺の面々との、これまで知られずにきた興味深い交流を描いた「作家の思い出」「作家の探求」「異論派の思い出」「仕事の方法」という、四章からなるが、第三章の最初の一篇をのぞき、すべてロイの作品である。原著に収められたジョレスの、ソルジェニーツィンおよびサハロフとの交流をテーマとする一連の論稿が、前共著『ソルジェニーツンとサハロフ』邦訳版に既に収録済みであるため、前述のように本書第二部には、一篇を除き、ジョレス稿を収めなかったからだ。

前著において、兄弟が、ソルジェニーツンやサハロフとの間で興味深い交流があったことが詳細に描かれていたが、読者は、『回想 1925－2010』第二部で、ロイの一連のエッセーにより、彼ら兄弟には、かのノーベル賞受賞者二人とは別の、やはり、それぞれが極めて個性的な一連の作家や芸術家との間で実に興味深い行き来があったと知らされる。自己の「スターリニスト」としての過去と葛藤していた作家のコンスタンチン・シーモノフや、『雪解け』の作者で雄弁家のイリヤ・エレンブルグ、兄弟と同じく父をスターリンに奪われた作家のユーリー・トリーフォノフ、あるいは詩人で、ソルジェニーツィンの『イワン・デニソヴィチの一日』を世に出した編集者のアレクサンドル・トヴァルドフスキーや、映画監督ミハイル・ロンムらの創作活動と、兄弟の思索と著作の活動とが、一体どう切り結び、刺激し合う関係

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

にあったのかは、興味深いテーマとなろう。たとえば、シーモノフやトリーフォノフらこそが、自身が保有する貴重で膨大なコレクションを、ロイの閲覧に供していた。

第三部の「日本語版への補遺」では、1985 年に登場したゴルバチョフ新書記長について、英語圏で最初に詳細にわたる単行本を出していたジョレス・メドヴェージェフが、日本外務省に内密に招聘され、ソ連新政権に関する東京でのレクチャーを請われたエピソードその他が紹介されている。筆者はジョレスから東京レクチャーを 1993 年に聞いていたが、彼が自らそれを活字にしたのは今回が初めてである。

2-4 『選集』全 4 巻と『著作集』

今世紀に入って以降に公刊された二人の協同作品には、前述の共著 3 点のほか、モスクワの人権出版社から出た『ジョレス＆ロイ・メドヴェージェフ選集』全 4 巻；Жорес & Рой Медведев, Избранные произведения, 1-4, М.: Права человека（2002～2004）がある。また、2011 年から、モスクワの時代社から『ジョレス＆ロイ・メドヴェージェフ著作集』；Собрание сочинений Жорез и Роя Медведевых, М.: Время.（2011～）の刊行が始まっている。

ただ、この『選集』全 4 巻には、1973 年の英国研究出張の折にソ連市民権を剝奪され、以後海外生活を余儀なくされたジョレスが欧米で刊行した、底本自体が欧文である著作は収録されていない。

ロイ著『歴史の審判にむけて（邦訳名；『共産主義とは何か』）』やジョレス『ルイセンコ学説の興亡』の既存の邦訳書は英語版からの重訳である。これら英語版は、その編訳者が指摘するように、いずれも露文原著のかなりの部分を省略している。ゆえに、露文『選集』『著作集』に基づく『歴史の審判にむけて』や『ルイセンコ学説の興亡』の完訳版が出れば、既存の邦訳版との異同のあり様が判明しよう。

3　目を背けない生き方

1960 年代～1970 年代にスターリン体制の病理と軋轢の内部構造を抉り出し、続いて、1980 年代から今世紀にかけ、今なお現代史を大きく制約する「原子力収容所」の歴史構造を炙り出していった作業は、並大抵の営みではなかった。少し先回りをして言えば、この課題は、ジョレスとロイとのメドヴェージェフ兄弟にそれぞれに独特な生き方と、命題の解析方法、そして、それを前提とした二人の類まれな共同作業なしには成し遂げられなかったと考えられる。

また、双子の兄弟に多くの共通点があるのは当然として、他方、兄＝ジョレスと弟＝ロイは驚くほどに異なる個性の持ち主でもある。後述のように、こうした、類まれな組み合わせがなければ、「原子力収容所」の歴史構造を炙り出す仕事は成しえなかったというのが筆者の仮説でもある。

3-1　父の背中

目を背むけることが出来ない課題や試練に直面するとき、人文・社会科学でも、自然科学でも、問われるものは研究者としての生き方である。

3・11 事故では、私たち自身の学界が、然るべき責任を果たしてきたのかどうか、そして、私たちの研究や教育が、核の安全神話の罠や虜に対し、どう向き合ってきたのかが問われた。

そうしたテーマを念頭において、『ルイセンコ学説の興亡』と『歴史の審判にむけて』から始まって、人類が「核の時代」を抜け出す課題に直面した今日に至るまでの兄弟の作品群を読み返してみると、『回想 1925－2010』は、いずれの時代、いずれの状況においても、既成のドグマや呪縛に囚われない、複眼的で瑞々しい発想をもちつつ、他面で、一歩一歩、堅実にことにあたるよう求めているように見える。二人はたえず、スターリンに奪われた父の背中を見据えながら成長してきた。

内戦期に赤軍で若き政治委員を務め、その後、政治委員を養成する労農赤軍・軍政大学の弁証法・史的唯物論学科副主任としてマルクス主義哲学を教えていた父・アレクサンドル・メドヴェージェフが 1938 年夏に逮捕され、極東コリマの強制労働収容所＝ラーゲリに送られた。兄弟が 12 歳のときだった。粛清が吹き荒れた 1937～38 年には、父の同僚の逮捕が相次ぎ、同キャンパスもレニングラードからモス

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

クワに移転した。レニングラード時代の軍政大学は、レニングラード大学（現サンクト・ペテルブルグ大学）と同じ区画にあった。父は、同大学哲学学部弁証法・史的唯物論学科でも教えていた。父を密告した哲学教授のチャギンは当該学科の学科長だった。父は 1941 年にラーゲリで死亡する。

コリマの父からは、兄弟宛ての手紙のほか、司法当局に出す上申書類が届いた。父は、有罪判決の事実無根を詳しく論証し、体験した虐待に言及し、拷問した予審判事の名前を列挙した。そして、何事があろうと虚偽の自白調書に署名するのを拒むと書いてきた。父はラーゲリから子らに語りかける。

「…君たちが青春期、人生の最盛期に足を踏み入れる門出には、私は君たちのすぐそばにいたかったです。できれば、自分の知識や経験を伝え、青春時代の過ちから守ってあげたかった。しかし運命がそれを許しませんでした…」。そして、子らは、父を慕い続け、以下の序言を励みに、今日まで生き通してきた。即ち、「…根気よくねばり強く、学校の履修計画に限らずに勉強しなさい…。感受性が強く、記憶力が鋭敏な時に時間を使いなさい。何ごとも一気に片づけようとせず、規律正しい仕事のリズムに慣れなさい。プレハーノフは、「規律ある仕事は大事だ。規律ある凡人は何か偉業を成しうる」という言葉が好きでした。だが、君たちは有能であり、才能に長けた若者です。考えるため、自己規制のできる人物になるため、強い個性と意思を鍛えるために学びなさい。忍耐力と自制心、これらこそが君たちに必要なものです。たとえそれがいかに大きく見えようと、その困難に打ち勝つことを習得しなさい…」[10] という戒めを胸に刻んで。

ロイは第一章の結び近くで、父への思いをこう吐露する。「私の人生と運命は父の人生と運命にきわめて密接に絡み合うようになった。父がコリマで死去して以降、わが社会の本質を究明したいという願望が強くなるばかりだった」。それゆえ、「本を書く時はいつも父のことを思っていた。私の生涯の最大の著作である、スターリンとスターリニズムに関する本は当初から父に捧げるのが念願だった」[11]。

だが、母は、モスクワ大学かレニングラード大学の哲学部に入学したいロイの決意が分かると、ティミリャーゼフ農科大学で生物学を学ぶジョレスを引き合いに出し、何処か別の道を選ぶよう嘆願した。彼女には哲学者や歴史学者になるのはあまりに危険に映ったのである。科学のうち生物学が最も平穏無事のように思えた。ところが、後に判明するように、実際はスターリン時代には、そして次のフルシチョフの時代でさえ、「誠実な生物学者でいることは、単に難しいばかりか危険なことであった」。

こうして二人は、誠実でいることが危険を意味する哲学と生物学の道に進み始めた。

革命 50 周年を祝うべき 1967 年の年明けの日付で、『ノーヴィ・ミール』編集長トヴァルドフスキーはロイの『歴史の審判にむけて』の草稿について、以下のようなメモを残している。「彼を思うと、この本がたどるに違いない静かな運命のことを思うと、背筋が寒くなる。この本は、この「お祝い」の年になくてはならないものになるだろう。われわれの「お祝い」気分をすっかり正してくれるこの本の価値は、いくら評価しても足りない」[12] と。トヴァルドフスキーも「打ちのめされた」ひとりであった。

3-2　驚くほどに異なる二つの個性が、文字通りの複眼でみる

兄弟は、一卵性の双子ながら、個性や趣向は驚くほど対照的だ。著しくシャイで遠慮がちのロイに対し、ジョレスは何事にも活動的で社交性豊かである。幼少期には、ロイが根っからの〈本の虫〉であったのに対し、ジョレスは屈強な〈万能選手〉だった。興味深いことに、双子は、父の子育てポリシーや父の転勤、逮捕、家族の強制退去、さらには独ソ戦による疎開で、十年制学校を 4 度も転校したが、その間、一度も同じ学校に通わなかったという。レニングラード時代、教師に双子の見分けがつかず、父は、兄弟が同じ宿題を持ち帰るのは問題外と考え、二人を別々の小中学校に通わせたとも聞いた。

父は、文武両道で鍛えようとした。読むべき本を選び、読んで聞かせた。兄弟を野外に連れ出した。ジョレスが万能選手となる一方、ロイはスポーツに身が入らない分、〈本の虫〉になっていく。何しろ、父の書斎は弟がワクワクする書物で溢れていた。万能選手は次第に〈生きものの虫〉になってゆく。

独ソ戦が始まると、「人民の敵」の子弟は、下士官を養成する軍事学校への道を閉ざされ、十年制学校を終了しないまま、17 歳で入隊させられた。ロイはその際、中等普通教育の終了資格が重要と考え、特例で終了資格をあたえる特別試験を受験した。ロイは損傷兵器の補修部門に配属される。資格試験の意

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

義を認めなかったジョレスは、クリミア半島東隣の激戦地タマンの前線に配属され、戦傷を負う。

除名・復党など党派歴豊かなロイと対照的に、兄ジョレスは、党活動は独創的な研究に百害あって一利なしと割り切り、非党員で通した。

かくて兄弟は、驚くほどにセンスや個性が異なり、当初に専攻したジャンルも著しく異なっていた。しかも1973年以降は、ロンドンとモスクワに分かれて活動してきた。ところが、兄・弟はたえず弟・兄を不可分の分身として思索し創作に励んできたごとくである。そして、ジョレスのサミズダートである『ルイセンコ学説の興亡』のいわば初版草稿が回覧されている異論派とその周辺の読者の間に、ロイの『歴史の審判にむけて』の初期サミズダート版の評判が伝わっていき、ソルジェニーツィンやサハロフのほか、第二部に出てくる一連の著名人のあいだにも、ジョレスとロイの存在が知られてゆく。ロイによれば、ジョレスのサミズダートは、遺伝学論争史というその道の専門家でなければ難しいジャンルの作品でありながら、自分のような文系の人間をふくめ、誰にもわかる、説得力ある作品であるがゆえに支持が広がったという。ジョレスは、自身の複眼と、そしてロイの複眼とを通して見えてくる遺伝学論争史を書いたと言えるのではないだろうか。ロイの歴史書も、そうした複眼の所産と読める。

3-3　あらゆる社会に通底する権利の実現をめした異論派の活動

日本では反体制民主派と呼ぶことが多かった、1960年代の後半に生まれたソ連異論派dissidentの活動は、「雪解け」と民主化の動きを逆転させるブレジネフ反動期に、科学や文学や通信の自由と人権のために闘った多様な知識人の活動のことだった。サハロフなどの超エリート科学者が公然と反政府的見解を述べたことはソ連指導部にとり青天の霹靂だった。この間のスターリン復権の試みや文学者への締め付け、プラハの春への軍事介入が、著名な芸術家・科学者・技術者の間での、より強い抗議運動を触発した。当局への公開状への連帯署名が数百筆に達し、ジョレスやロイやその他のタイプ原稿本がサミズダートとして数千人の読者の間に複製され回覧されることもあった。1970年に精神病院に拘禁されたジョレスを内外の広範なアピールを組織して解放させた闘いは、ソ連における人権擁護運動の最初の大勝利であり、国家権力にとっては最初の敗北であった[13)]。

ジョレスの『ルイセンコ学説の興亡』もロイの『歴史の審判にむけて』も、もともとは、ソ連国内で合法的な刊行物として出版を予定した書物であり、ソルジェニーツインの『イワン・デニソヴィチの一日』が、トヴァルドフスキー編集長のもとで『ノーヴイ・ミール』誌に掲載された頃は、そうした可能性が現実にあった。ロイのこの本の仕事は「1962年末から、なんの秘密もなく始めていた。この最初の版を読んだのが、何とソ連共産党中央委員会書記のイリイチェフとアンドロポフであった」[14)]という。

だが、ロイが第三章のトリーフォノフとの交流記で書いたように、兄弟の著作は、ブレジネフ反動期に、革命50周年を祝うには相応しくないとして国内では公刊できなくなった。変わったのはブレジネフ政権側であって、兄弟ではない。二人の異論派活動は共に、創作と表現の自由、内外の研究仲間との意見交換の自由のための闘いであり、これら自由はいずれも、ソヴィエト社会主義連邦共和国憲法が保障する諸権利の一部でもあった。つまり、兄弟の闘いとは、いかなる社会にも通底する権利の実現をめざす、その意味で、ソヴィエト社会主義における、まさしく適法的、合法的な闘いであった[15)]。

3-4　兄弟の歴史観を支える裏付け

兄弟にはロシア革命の歴史分析書がある。十月革命の60周年に出たロイ著『10月革命』と、70周年に出たジョレス著『ソヴィエト農業』であり[16)]、共に、ソ連社会の困難を、党と国家の政策選択の致命的な誤りに求める分析方法を採用している。前者は、レーニンが率いた内戦と戦時共産主義の歴史的惨事の要因を、従来の所説でいう外国の干渉よりも、農民層への無理解と、農民政策の誤った選択に求める。後者は、ソ連社会の歪みの究極要因をスターリンの農業集団化に求め、篤農家など最も勤勉な社会層を根絶した「社会主義」の、体制的病理を解明した。ロシア社会にも一発逆転型の「革命」でなしに、漸進的な「進歩」を追求する選択肢がありうるし、実際、それぞれの局面で様々な選択肢がありえたことを示唆した。二人は、ロシア革命史研究から、「革命」ではない「進歩」の必要を示唆してきた。

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

兄弟のそうしたロシア革命史観の形成は、ロイの内戦期の実相をめぐる理解の進展に関わりがあると思われる。例えばロイも、1977年に『静かなドン』の盗作問題に関する書物を出した一人であるほか、1978年には元騎兵部隊指揮官の老スタリコフと共著で、赤軍に粛清されたコサック軍指揮官ミローノフの名誉を回復する作品を上梓している[17]。これらの作品を準備するのにロイが膨大な一次資料を読み込んでいたらしい状況が第三章に描かれている。トリーフォノフは、内戦期のトリーフォノフ家の個人的文書類を所蔵していたほか、彼自身が粛清された赤軍騎兵軍団指揮官のドゥメンコとミローノフの証言の蒐集家だった。こうしてロイは、トリーフォノフの好意で膨大な内戦期の史資料を閲覧していた。

シーモノフもロイに、惜しげもなくコレクション閲覧の便宜を供した。スターリン賞を何度も受けた作家同盟幹部シーモノフは、保守派と観られた作家であった。しかし、彼こそロイが知己を得た最初の作家だった。そして、スターリン批判の歴史研究に本腰を入れる決断をしたのは、彼との出会いの後だったとロイは言う。シーモノフは『歴史の審判にむけて』の「初期の草稿を読み、賛意を示したばかりか、この仕事に際し、支持と援助を示す用意があると表明してくれたわが国の著名人の最初のひとり」でもあった。しかも、作家とロイとの出会いは、作家が、当時広く出回っていたジョレスの『ルイセンコ学説の興亡の』のコピーを読んで感銘を受け、ジョレスとの会見を希望したことが機縁だった。作家は、「「スターリニスト」と呼び称される人間」[18]であった過去との葛藤の日々を生きていたのである。

4　背後に1957年の「ウラルの核惨事」が

兄弟の生涯をよく知る中野徹三氏は、『回想1925－2010』に寄せられた書評の恐らく第1号と思われる論考「メドヴェージェフ兄弟初の人間的記録として」において、「ジョレスとロイ、この二人のメドヴェージェフ双生児兄弟が、彼らの数多くの抜きん出た著作活動を通じて、旧ソ連の社会と政治、思想を支配していた「社会主義的」反民主主義的体制の惨状と罪状とを容赦なく暴き、この社会の解放に大きく寄与するとともに、同じく世界と日本の左翼運動全体を厚く覆っていたスターリン主義の悪夢を破る内外の闘いにも比類ない武器を提供し続けたことは、もはや誰も否定できない事実として、歴史が既に判決を下している、といってもよい」[19]と述べている。

『回想1925－2010』は、満85歳の記念に二人の著作活動を、中野氏が言うように、まさしく「兄弟初の人間的記録として」とりまとめ、上梓したものである。

筆者は、ここで、『回想1925－2010』が有する特徴の、別のもうひとつの側面に着目してみたい。

筆者は、邦訳版『回想1925－2010』刊行を機に、1960年代のジョレスの『ルイセンコ学説の興亡』とロイの『歴史の審判にむけて』から今世紀初めの共著『知られざるスターリン』に至る、兄弟による一連の労作が書かれた舞台裏を改めて探ってみると、今回初めて気づき、分かってきた面がある。とくに印象深かったこととして、次の4点が挙げられる。

1、無名の犠牲者や生き残り、あるいは彼らの知人が証言者となり、兄弟に書かせた面があること
2、旧ソ連の崩壊までは、実名を明示できなかった元囚人研究者の協力があったこと
3、膨大なコレクションを保有する作家たちが、貴重な史資料を兄弟の閲覧に供したこと
4、兄弟がかかわった1960年代の異論派活動の広がりの契機に「ウラルの核惨事」があること

4-1　名もない生き証人がロイを訪ねて

兄弟が父の死の詳細を知るようになったのは、1960年代も半ばになってのことだ。それは、ロイが既に、元囚人や古参ボルシェヴィキ、それに老作家たちから細切れの証言を集めながら、スターリンとスターリン主義に関する浩瀚な書物を書いている頃だった。ロイは言う。「これらの人びとは、私に対し何か喜んで物語を聞かせる用意があり、少なくとも、自分の意見を吐露してくれる人々だった」。そして言う。「わたしの名前が往年の「コリマ人（ここではコリマ収容所の体験者のこと）」の間に知れわたるようになると、矯正労働収容所や拷問や刑務所の体験者の多くが、奴隷状態の辛い経験を語り聞かせるために、そして彼らが、収容所内のほかの犠牲者から打ち明けられたすべてを伝え聞かせるために、彼ら

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

自身でわたしを見つけだそうとしていた」[20] と。鉱山事故の重傷と骨肉腫で死んでいった父についてロイを探し知らせてくれたのも、「歴史書」で「子息」のロイに気づいたコリマの元囚人女性であった。

兄弟の作品には、スターリン体制の犠牲者が、二人の筆に託した側面のあることが見てとれる。

コリマの元囚人女性は、衰弱しつつあった父から、風変りの名前の双子兄弟がいることを聞いていた。ロイの「歴史本」は、サミズダートによるか、口コミによるか、ロイは明記していないので不明だか、往年の「コリマ人」たちにもその存在が知られていたことになる。

ロイは、1962 年末に書き始めたこの『歴史の審判にむけて』を半年ごとに書き直した。ロイのタイプ稿は、トヴァルドフスキーなどは例外として、読者からは返してもらうことを常としていたという。

ジョレスの『ルイセンコ学説の興亡』の初期の版には 1962 年の初版のほか 64 年版と 66 年版もあるようだ。64 年版は回覧された 2 年間に、数千人が読んだといわれる。ジョレスとロイのサミズダートは回覧され、版を重ねながら、ソルジェニーツィンやサハロフその他の一連の著名な作家や科学者からも注目されはじめ、口コミを含めて影響力を広げていった。サミズダートの改訂の際にも、読者が書きこんだコメントや要望が生かされたに違いない。その意味でサミズダートは、ある種の双方向のコミュニケーションとしての性格をも有していた。

4-2　実名を明かせなかった元囚人研究者による協力

ジョレスは、1976 年 11 月に「スターリン批判 20 周年」を特集する英科学週刊誌 New Scientist の求めに応じ、1957 年に起きた「ウラル核惨事（チェルノブイリ以前の世界最大の核事故）」に関する論稿「Two Decades of Dissidence 異論派の 20 年」を寄せ、当時まだ西側に知られざる同事故とその惨状を暴露したうえ、この核事故こそ、クルチャトフらのソ連核物理学者エリートと、迫害を受けていた遺伝学者とを結びつけた最大の要因であると述べた[21]。寄稿論文を敷衍して出た単行本が、有名な『Nuclear Disaster in the Urals（邦訳『ウラルの核惨事』であり、本書は 3・11 後に改めて注目を浴びている。

ウラル核惨事は、ソ連当局に加え、その公表の自国の核軍拡政策への悪影響を懸念した米英当局も、封印し続けた。興味深いことに 58 年 3 月のソ連の一方的な核実験停止の理由のひとつが、今日、マヤーク再処理工場として知られる、主力の核兵器生産施設で使用済み核燃料の爆発事故が起こったことで、チェリャビンスク-40 のプルトニウム生産が停止したことだった。チェリャビンスク-40 を復旧し、また、別の閉鎖都市のトムスク-7 とクラスノヤルスク-26 のプルトニウム生産を増強する必要があった。

ジョレスは、英文原著『ウラルの核惨事』が出る前年の 1978 年に『Soviet Science（邦訳「ソ連における科学と政治」）』を上梓している。出国後、5 年間の欧米での研究生活を経験したジョレスが、西側の読者にスターリン時代を含むソ連科学の知られざる歴史と現状を分かりやすく説いた概説書である。そこには、戦時期に、特別な収容所内研究センター Prison Research Center 網が全土に創設され、逮捕・拘禁された囚人科学者・囚人技術者と、自由な研究者とが協力して、軍用機その他の兵器開発にあたり、そのシステムが戦争末期と戦後期には核兵器の研究開発にも援用されるに至る歴史が紹介されている[22]。また、本書でも、ウラルの核惨事に衝撃を受け、放射能の真の危険を十分に認識したエリート核物理学者が、やがて若い異論派と結びつき、彼らのサミズダートを支援し始めた経緯が紹介されている[23]。

筆者は、『回想 1925－2010』のジョレス稿「ソルジェニーツィンとのオブニンスクでの最初の出会い」に登場する、放射線遺伝学者ティモフェーエフ＝レソフスキーが、ジョレスによるウラル核事故と囚人研究者を動員するソ連核開発体制の考察を支えるキー・パーソンの役割を担ったと考える。

オブニンスク放射線医療研究所で、放射性分子生物学部門を担当するジョレスの直接の上司であったティモフェーエフ＝レソフスキーは、放射線生物学と放射線遺伝学の世界的権威だった。戦前からの留学先、ベルリンでソ連軍に逮捕された彼は、1955 年まで原子力関連を含む Sharashka＝シャラーシカ（囚人学者を集め開発研究に従事させる監獄施設）に収容されていた。釈放後、核事故を起こしたキシュチュムと同じスヴェルドロフ州の科学アカデミー・ウラル支部で生物物理学部門を立ちあげている。こうしたキャリアをもつ上司から、機微に触れる内輪の情報をえていたというジョレスにとり、彼の存命中、「知りすぎた」人物の名前を、ソ連極秘の核開発体制との脈絡において語ることは憚られた[24]。

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

4-3　膨大なコレクションを保有する作家たちが、貴重な史資料を兄弟の閲覧に供したこと

前述したとおり、本書では、シーモノフやトリーフォノフらが、ロイに膨大なコレクションを閲覧に供した様子が紹介されている。

シーモノフのもとには、スターリンによる弾圧というテーマに関連する、当時は公刊できない多様な文書や回想録や芸術作品が寄せられ、彼はこれら史資料を個人の資料として注意深く保管していた[25)]。

シーモノフが保管する文書は、青年将校から元帥に至る軍人たちの談話の膨大な速記録をも含んでいたという。シーモノフは彼ら軍人を自宅に招き、会話や談話、証言を速記しタイプした。これらの記録は全て、シーモノフが大祖国戦争史戦争に関する自著の史料の証言録として準備していたようだ。

トリーフォノフは、兄弟の境遇と似て、父が、内戦時に労農赤軍の政治委員を務め、やはりスターリンのテロルで死んだ。彼のもとには偶然、内戦期の親戚の個人的文書類が入った長持が保存されていた。兄弟と同年生まれの彼は、文学上の出来事や、国内情勢に対する見解が大方一致していて、多くのことで互いに助け合うことができた。トリーフォノフが、文学ばかりか歴史にも関心をもち、なかでも 19 世紀と 20 世紀のロシアの革命運動史に興味を持っていたからだ。彼を深く捉えていたのはスターリニズムのテーマで、その根源を前世紀の思想及び政治の潮流の中に見出そうとしていた。彼が関心をもちそうな回想録などのタイプ稿をロイが届けると、トリーフォノフも、万巻の書庫から、ロイが重要と思う本の貸し出しを容認した。トリーフォノフはまた、稀有な雑誌の製本されたバックナンバーを完備していた。作家は自営の製本工に特注していた[26)]。

ロイはこのように、シーモノフやトリーフォノフの好意で彼らが個人的に保有する貴重なコレクションを閲覧することができた。シーモノフやトリーフォノフにとっても、ロイとジョレスがもたらす知見は貴重な世界であった。そして、ロイがそこで得た知見のエッセンスを、兄弟で共有することになる。

4-4　異論派とその周辺における兄弟の位置と 1957 年の「ウラルの核惨事」との関係

ロイ稿「サハロフに関する回想より」が紹介するように、フルシチョフ失脚直前の 1964 年夏に、科学アカデミー総会でルイセンコの推すヌジディンが落選する事件が起きた。分子生物学研究所長のエンゲルガルト会員がヌジディンの候補資格に疑念を表明し、それに「水爆の父」のサハロフと、彼の師タムが同調する発言をしたからだった。ロイの説明では、1948〜1949 年のルイセンコ派による破壊的キャンペーンの犠牲を免れた遺伝学者らが、当時、特権的地位を与えられていた核開発関連の分野に匿われていて、そこでは放射線生物学が発展しつつあったという。また、ロイによれば、1962 年に出たルイセンコ一派を批判するジョレスの「農業生物学論争史（ルイセンコ学説の興亡）」のサミズダートが文学者や科学者の間に複写されて出まわり、社会の有識者層の一部に反ルイセンコの雰囲気を醸し出すほどに広まった。とりわけ核物理学者のグループでは科学アカデミーの総会以前からよく知られていた[27)]。

1966 年初に著名な科学者・作家・芸術家 25 名が党首脳に宛てスターリン復権阻止を求める共同書簡を送った際、共同署名運動の発案者のエルンスト・ゲーンリが、ロイの人脈に着目し、協力を依頼する場面が、ロイとシーモノフおよびエレンブルグとの交流の箇所に出てくるが[28)]、ロイの人脈の確かさを支えるものが、やはり『歴史の審判にむけて』と『ルイセンコ学説の興亡』に対する共感の念だった。

1956 年 2 月のフルシチョフのスターリン批判後、知識層の中にようやく新たな動きが生まれ、生物学者のみならず、化学者や物理学者など数百人が、ルイセンコと彼を支持するフルシチョフに対抗し結束を固めた。遺伝学者は放射能の人体への有害さを物理学者らに説こうとした。遺伝学、とりわけ放射線遺伝学の復活を求める訴えに数百人が署名した。核物理学の帝王、クルチャトフ自らがこの訴えをフルシチョフに手渡した[29)]。

1956 年はポーランド／ハンガリー動乱の年でもある。ソ連でも、スターリン粛清の内情を知った若い政治的異論派が登場し始めたが、彼らはソ連軍のハンガリー介入直後に一斉逮捕された。スターリン粛清の犠牲者数百万人の名誉回復が進行中であったため、そして西側の眼がスエズ動乱に向けられる中で、ソ連の若い数百人の逮捕は注目を浴びなかった。しかも、この時点はまだ、科学界のエリートを含む、フルシチョフに異議を唱える知識人グループと、若手研究者や学生のグループとに、接点が乏しかった。

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

しかしながら、若手の民主派と真面目なエリート科学者を隔てた垣根が1962〜64年頃には失われ、若手の異論派とエリート科学者の異論派との協力関係が生じた[30]。

この垣根を取り払ったのが、1957年9月に起きた悲劇的な「ウラルの核惨事」、つまり、チェリャビンスク-40のキシュチュムにおける使用済み核燃料の爆発事故であった。核物理学者たちは、いよいよ放射線生物学と遺伝学の問題に極端に神経質に振舞うようになり、政府もついに放射線生物学、放射線医学、医学の分野で古典的遺伝学を合法化する措置をとらざるをえなくなった。

予知できたはずのものを、その可能性を信じなかったことで起きたこの核惨事が、核物理学者の状況を変えた。彼らは、放射能の真の危険性、核爆発の真の影響を十分に認識した[31]。

ジョレスは言う。「多くの国家勲章や政治面での評価、称号、賞、学位、そして重要な地位までがすべてその威信を侵食され、下落した。…科学界のピラミッド型重層構造の崩壊は、若い政治的に活発なグループとエリート層のより正直な代表との密接な接触をいっそう簡単にした」。1957−58年当時までは考えることさえできなかった、両者の結びつきが、1962−64年にでき始めた。「両世代の協力や友好が可能になっただけでなく、年上の、特権に恵まれた世代が、若い同僚たちの政治的異義申し立てを直接に支持した。彼らはサミズダート（地下出版）網を組織するための資金援助を行ない、サミズダートの著作を守り、再生産するための設備を提供し、問題に巻き込まれた人々を強力に励まし、擁護した」[32]。

両世代の結びつきが始まったという1962−64年に、まさしくジョレスもロイも、後に『ルイセンコ学説の興亡』となり、『歴史の審判にむけて』となる、サミズダートの論稿を執筆中であった。

そして、ジョレスとロイがかかわった、1960年代におけるソ連における異議申し立て運動の始まりとその広がりが、1956年の20回大会におけるフルシチョフの秘密報告に加えて、1957年の「ウラルの核惨事」を、もうひとつの不可欠の契機としていたことをも、是非、確認しておきたい。

5　結びに代えて ── 現代史の分析視角としての原子力収容所 Atomic Gulag 認識

5-1　文字通りの歴史家と、分子生物学学徒の政治史家と

今回のジョレス＆ロイ共著『回想 1925−2010』の訳業を機に、1960年代から今日に至る兄弟の主要著作の刊行と、それら作品の邦訳の経緯を一覧表にしてみた（別表）。

ロイはそのものズバリの歴史家である。ジョレスは、科学者であるが、政治史家でもある。

ジョレスは元来、植物の生殖や成熟・加齢のメカニズムへの関心から生物学を志した分子生物学と加齢学の専門研究者である。分子生物学者としての彼は、若手専門家として1957年に、放射性同位元素（アイソトープ）に関する第1回ユネスコ国際会議（パリ）に派遣され、海外にも多くの知己を得る。他方、加齢学者としてのジョレスも海外の加齢学界から注目され、1960年には国際学会からの招聘状が本務校のティミリャーゼフ農科大学に届くが、ジョレスは、海外との学術交流に後ろ向きの大学当局や、国際郵便の授受、旅券手続きでも不当な扱いなどの妨害を受け始めた[33]。ジョレスが、学術交流や信書の自由、検閲の廃止などをめぐる異論派として登場する一方、自らも当事者のひとりとして参加した「ルイセンコ論争」について、同時代史的な論争史の論稿の執筆し始めたのも、こうしたさなかのことだった。

当局から危険視され、妨害を受けていた、この気鋭の分子生物学者を、1962年に敢えて採用し、しかも、ジョレスの上司のポストに、前述のティモフェーエフ＝レソフスキーを迎えたのが、オブニンスクの放射線医学研究所であった。研究所は、生物学的・医学的に、中性子が組織に与える影響を研究していた。ジョレスは、国内出版の道を閉ざされた自著とロイ著を海外で刊行したという、反体制活動の廉で1969年に解雇されるまで、当研究所で働いた。同じ閉鎖都市＝オブニンスクにある、別の物理エネルギー研究所は、技術陣の高い死亡率で悪名を馳せており、ジョレスは、墓碑に刻まれた生年と死亡の月日から判断して、住民の平均余命がソ連全体やモスクワよりもはるかに低いことに驚いたという[34]。

核開発の実相に迫ったジョレスの『ウラルの核事故』や『チェルノブイリの遺産』が、今日でも余人をもって成しえない文献に含まれる所以でもある。旧ソ連の科学は、同国特有の政治との関係を問わないでは、有効な議論にならないほど政治と社会体制に深く絡み合っていた。また、旧ソ連の政治と社会

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

別表　ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ／Zhores & Roy Medvedev 兄弟の主要科学論争・歴史・政治史・核問題関係の著作活動年表

年	著者　初版等	著者　邦訳版等
1925	グルジアのチフリス（現トビリシ）で誕生	
1938	スターリン大粛清の頂点。父アレクサンドルが逮捕される	
1941	父、極東マガダン地方コリマのラーゲリで死亡	
1943	兄弟、17歳で「大祖国戦争」に従軍。ジョレスはタマン戦線で負傷	
1953	スターリン死	
1956	ロイ、ソ連共産党に入党。ジョレスは一度も入党せず。	
1957	分子生物学専攻のジョレスが、アイソトープ（放射性同位元素）に関する第1回ユネスコ国際会議（パリ）で発表 ウラル山系キシュチュムの核兵器製造施設の使用済み核燃料が爆発＝「ウラルの核惨事」	
61-66	Zh 62年に初版『農業生物学論争史（ルイセンコ学説の興亡）』、62年、64年に改訂版。サミズダートとして異論派内や核物理学者に広まる	
62-68	R 62年末から『歴史の審判にむけて』の執筆開始。半年毎に改訂。やがてサミズダートとして回覧され、異論派作家やサハロフらも注目	
64-70	R『政治日誌』という名の文書を毎月5部刊行。定期読者は約40名	
1968	サハロフが海外ベストセラー『進歩、平和共存と知的自由』で、ロイの「幻の大著(Let History Judge)」の存在をアピール	
	R Let History Judge: the Origins and Consequences of Stalinism (in Russian)	
1969	ロイ、『歴史の審判にむけて』の執筆活動を理由に、ソ連共産党から除名処分を受ける	
	Zh The Rise and Fall of T.D. Lysenko	
1970	ジョレスが精神病院に監禁される。ソ連内外の科学者や作家の抗議で釈放される	
	R Let History Judge: the Origins and Consequences of Stalinism (in English)	
1971	Zh The Medvedev papers: fruitful meetings between scientists of the world	
	ZhR A Question of Madness	Zh 金光不二夫訳『ルイセンコ学説の興亡』河出書房新社
1972		Zh 金光不二夫訳『ソビエト科学と自由』タイム・ライフ社（Medvedev Papers）
1973	ジョレスが英国出張中にソ連市民権を剥奪される。以後、ロンドンを拠点に執筆継続	
73-74		R 石堂清倫訳『共産主義とは何か（上・下）』三一書房（Let History Judge）
1974	Zh Ten Years after Ivan Denisovich	R 石堂清倫訳『社会主義的民主主義』三一書房
1975	Zh Secrecy of Correspondence Is Guaranteed by La	Zh 安井侑子訳『ソルジェニーツィンの闘い』新潮社（Ten Years after)(1974年）
	Zh National Frontiers & International Scientific Coopersation	
1976	ZhR Khrushchev: The Years in Power	
	Zh An article; "Two Decades of Dissidence" on the nuclear disaster in the Urals, was carried on New Science, Nov 4, 1976.	
76-77		R ロイ編集／石堂清倫他訳『ソヴエト反体制』第1・第2輯、三一書房
1977	R Problems into the Literary Biography of Mikhail Sholokhov （ショローフは『静かなドン』の原作者ではないとの所見を展開）	
	Zh Hazards of Nuclear Power (with A. Roberts)	ZhR 石堂清倫訳『告発する！狂人は誰か』三一書房
1978	Zh Soviet Science	R 佐藤紘毅訳『ソ連における少数意見』岩波新書
	R Philip Mironov and the Russian Civil War (with S. Starikov)	
1979	Zh Nuclear Disaster in the Urals	
	R On Soviet Dissent,	
	R Nikolai Bukharin: The Last Years (in Italy)	R 石堂清倫訳『失脚から銃殺まで――ブハーリン』三一書房
	R On Stalin and Stalinism	ZhR 下斗米伸夫訳『フルシチョフ権力の時代』御茶の水書房（1980年刊）
1980	R The October Revolution (published in 1979)	R 石堂清倫訳『スターリンとスターリン主義』三一書房
1981	R Leninissm & Western Socialism	Zh 熊井謙治訳『ソ連における科学と政治』みすず書房（1981年刊）
1982	R Khruschev	Zh 梅林宏道訳『ウラルの核惨事』技術と人間
	Zh Andropov	
1983	R All Stalin's Men	Zh 毎日新聞外信部訳『アンドロポフ』毎日新聞社
	R Nikolai Bukharin: The Last Years (in English)	
1986	ソ連ウクライナ共和国チェルノブイリ原子力発電所で大規模な事故	
	Zh Gorbachev	
	R China & the Superpower	
1987	Zh Soviet Arriculture	Zh 毎日新聞外信部訳『ゴルバチョフ』毎日新聞社
	ジョレスが、日本外務省の内密の招へいにより、初の来日。ゴルバチョフ新書記長に関して東京でレクチャー	
1989	ロイが、ソ連共産党に復党。ベルリンの壁崩壊	
1990	ゴルバチョフ政府がジョレスのソ連市民権を回復	R ロイ／キエザ共著『証言 内側から見たペレストロイカ』毎日新聞社
1991	ソ連邦崩壊。ソ連共産党解体	
1992	Zh Legacy of Chernobyl	Zh 吉本晋一郎訳『チェルノブイリの遺産』みすず書房
1995		Zh 佐々木洋訳『ソヴィエト農業；1917-1991』北海道大学図書刊行会
1997	R Russian Revolution in 1917 (in Russian in 1998)	R 石井規衛訳『10月革命』未來社（1998年刊）
1998	R Capitalism in Russia? (in Russia)	R 石井規衛・沼野充義監修『1917年のロシア革命』現代思潮新社
		Zh『市場社会の警告―シンポジウム 市場社会と共生の原理』現代思潮社
1999	R New Crisis of Russia (In Russian)	R 海野幸男・渡辺寛美訳『ロシア危機――1998年夏』現代思潮社,
		R『ロシアは資本主義になれるか？』（加藤志津子・蓮見雄訳, 現代思潮社
2000	R Putin's Enigna (in Russian)	R 海野幸男訳『プーチンの謎』現代思潮新社,
2002	ZhR Unknown Stalin (in Russian)	
02-04	ZhR 選集全4巻Selected Works, I -IV (in Russian)	
2003	Zh Stalin and the Jewish Question	ZhR 久保英雄訳『知られざるスターリン』現代思潮新社
2004	ZhR Solzhenitsyn and Sakharov: Two Prophets (in Russian)	
2005		ZhR 大月晶子訳／佐々木洋解題,『ソルジェニーツィンとサハロフ』現代思潮新社
2007	Zh Nutrition and Longevity (in Russian)	R 海野幸雄訳／佐々木洋対談・評註『スターリンと日本』現代思潮新社
2008	Zh Polonium in London (in Russian)	
2010	ZhR Memouirs 1925-2010（Russian)	
2011	R And Quiet Flows the Don; Puzzles and Discoveries of the Great Novel (in Russian)	
	ZhR 著作集 Collected Works (in Russian)刊行開始	ZhR 佐々木洋監訳／天野尚樹訳『回想 1925-2010』現代思潮新社（2012年刊）

注：1．Zh は Zhores 著の、R はロイ著の、ZhR は兄弟共著の略。2．本リストは、ジョレスの加齢学や分子生物学の専門分野の著作を含まない。

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

体制に占める科学の地位を知らないでは、スターリン時代やフルシチョフ時代の歴史も語れない。

それゆえ、ジョレスの『ルイセンコ論争の興亡』とロイの『歴史の審判にむけて』には、互いに前提しあう関係がある。二つの著作同志も、いわば「兄弟」同志の関係にあったのである。

5-2　現代史の分析視角としての原子力収容所 Atomic Gulag 認識

小論の冒頭で、「ジョレス＆ロイ・メドヴェージェフの双子兄弟は、20 世紀の世界史を揺るがした旧ソ連体制の、外からは容易に窺がえない科学や政治や社会の軋轢と病理を、その歴史と構造の深部から解き明かし、世界の言論界に一石を投じてきた」と述べた。

それでは、歴史家と政治史家の兄弟は、21 世紀世界の言論界にどのような一石を投じているのか？

この問いは、日本人研究者として 3・11 福島事故の歴史展望とのかかわりで論議する必要がある。

『国会事故調報告書（2012 年 9 月）』は冒頭で「日本の原発は、いわば無防備のまま、3・11 を迎えることとなった」[35] と指摘する。これに対し、吉岡斉著『新版　原子力の社会史』は、「なぜそれがソ連で一九八六年に起きたチェルノブイリ事故に次ぐ、史上最大級の原子力事故に発展してしまったのかについて、基本的に考え直す必要がある。そのためには歴史を検証する必要がある」[36] という。

日本人の多くが、「無防備のまま、3・11 を迎える」ことになったのは何故か。そのための真摯な検討には、まさしく吉岡斉氏の求める「歴史の検証」が不可欠である。

そこで筆者が重視したのが、メドヴェージェフ兄弟が、キシュチュム核惨事とチェルノブイリ事故と格闘するなかで、そして、ソ連崩壊後に機密が解除されたアルヒーフにも拠りながら炙り出した、『知られざるスターリン』における「原子力収容所」認識であった。

ジョレスによれば、「異常なまでの短期間にソ連の原子力産業の全部門を作り上げた功績は誰になるのか、…これに対する明確な解答はない」。だが「原子炉、工場、実験場、全てのインフラ等の諸問題を実際に解決した早さについては、紛れもなく収容所が主役を演じている。収容所は、機動性に富み、本質的には奴隷労働であるが、熟練労働の、ユニークで巨大な供給源だった」。そして、原子炉や実験場を建設した囚人労働者の口封じのための島流し先が極東マガダンのコリマだった。こうして、ジョレスはいう。「もしスターリン型の国家政治と経済が収容所その他の強制労働のシステムなしにでもやってゆけておれば、ソ連にはあれほど火急に原爆や水爆の必要性はなかったであろう。スターリンのテロルとスターリンの収容所が、それ自体が、他の全世界への恐怖と脅威とを生み出していたのである」[37] と。

人権無視と安全軽視、差別と抑圧の究極の事例が、兄弟の云う「原子力収容所」だった。米英ソ（中仏でも）の核帝国が人権や民族差別を顧みずに展開した核開発競争が、原子力開発全体の安全性を規定してきた。原発をめぐる安全神話や、わが国の「原子力村」の利権構造の問題も、そうした核開発の歴史のなかに位置づけて検討する必要があろう。

3・11 事故後に、多くの再版への希望が叶えられて増補版が出た、故・中川保雄の『増補　放射線被曝の歴史』は、「今日の放射線被曝防護の基準とは、核・原子力開発のためにヒバクを強制する側が、それを強制される側に、ヒバクがやむをえないもので、我慢して受忍すべきものと思わせるために、科学的装いを凝らして作った社会的基準であり、原子力開発の推進策を政治的に支える手段なのである」[38] と、かねてから指摘していた。中川の労作は「マンハッタン計画」以降の米国の核開発を克明に追究した実証研究である。これにかかわって、先行する米国に猛追した「原子力収容所」の核開発が、ソ連内外の被曝防護基準にどう作用したかも重要なテーマとなる。

一方では、「原子力収容所」の側から、他方では「マンハッタン工区」の側から、改めて内外の核開発の歴史を洗い直し、日本人の多くが、なぜ「無防備のまま、3・11 を迎える」ことになったのか、その「歴史の検証」に取り組む必要があるのではないか。筆者は、当面、スターリンの「原子力収容所」が、わが国を含めた世界の原子力開発を、どう規定したのかという側面から検討を進めたい。

注

1）dissident＝異論派．わが国では「反体制民主派」とも呼ばれた．ソルジェニーツィンとサハロフ，および

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

メドヴェージェフ兄弟が旧ソ連異論派の代表的人物と報じられたことが多い．

2）Жорес & Рой Медведев, *Из Воспоминаний 1925-2010*, (Права человека, Москва, 2010). の邦訳版（佐々木洋監訳・天野尚樹訳）．同書巻末に拙稿解題「「収容所群島＝原子力収容所 Atomic Gulag」を炙り出した一卵性双生児の人間形成」を収めてある．

3）米原万里（2006）『打ちのめされるようなすごい本』文藝春秋社，166-167 頁．

4）Жорез & Рой Медведев（2010）*Неизвестый Сталин*, Права человека, c.234., Zhores & Roy Medvedev (2003), *Unknown Stalin*, L.B. Tauris, pp.150-15., ジョレス&ロイ・メドヴェージェフ共著／久保英雄訳（2003）『知られざるスターリン』現代思潮新社，208-215 頁．

5）吉岡斉（2011）『新版　原子力の社会史』朝日新聞社出版，398 頁．

6）Жорез & Рой Медведев, *Неизвестый Сталин* c.4-5., Zhores & Roy, *Unknown Stalin*, pp.IX-X., ジョレス&ロイ『知られざるスターリン』，13-14 頁．

7）メドヴェージェフ兄弟共著／大月晶子訳（2005）『ソルジェニーツィンとサハロフ』現代思潮新社刊．同書巻末に，拙論「解題にかえて ── メドヴェージェフ兄弟のソルジェニーツィンおよびサハロフとのトリプルな関係」を収めてある．拙論は，「ソルジェニーツィンの『収容所群島』の歴史的含意を検証するのが兄弟の解明する〈ソ連核開発体制〉であること，そして信念の人サハロフの〈理想主義〉と〈平和主義〉に点火せしめた最も重要な触媒が，実は〈ルイセンコのエセ遺伝学〉が誘爆した〈核惨事〉にほかならないこと」を指摘した．同書，416-417 頁．

8）サハロフ自身，1953 年初に重病になった原因を放射能症と懸念していた．アンドレイ・サハロフ著／金光不二夫他訳（1990）『サハロフ回想録（上）』読売新聞社，268-269 頁．健康に恵まれないサハロフについて，医者たちは，「極秘の核施設」で働いたり，核実験に立ち合ったりしたことが，「サハロフの免疫機構を弱めた」と考えていたという．ロイ・メドヴェージェフ（2005）「サハロフに関する回想より」『ソルジェニーツィンとサハロフ』90 頁．

9）ジョレスは一例として Министерство Российской федераций по атомной энергии и др.（1995），*Создание первой советской ядерной бомбы*, Энергоатомиздат. を挙げる．市川浩氏の労作も，同書をなかば「公式」の通史のひとつとみて重視する．市川浩（2007）『冷戦と科学技術 ── 旧ソ連法 1945－1955 年』ミネルヴァ書房，８，13 頁．

10）『回想 1925－2010』現代思潮新社，2012，24 頁．

11）同上，40 頁．

12）同上，118 頁．1966 年晩秋に，ロイからサミズダートのファイルを手渡されたトヴァルドフスキーの，以下のような読後感メモが残っている．「かくも禁欲的で，巨大で，大胆で，崇高な仕事に，ある人間が挑み，可能な限りのものを集め，体系的で説得力のある，しかも全く党派的な叙述でスターリン時代の歴史を描き出そうとした．これほどまでに必要不可欠な本，…．このテーマから目を背けたいのだが，背けることはできない」．同上，118 頁．

13）拙論（2005）「解題にかえて」『ソルジェニーツィンとサハロフ』417 頁，426 頁．

14）ロイ「サハロフに関する回想より」68 頁．

15）ジョレス・メドヴェージェフ著／安井侑子訳（1974）『ソルジェニーツィンの闘い』新潮選書，66 頁．

16）ロイ・メドヴェージェフ著／石井規衛訳（1998）『10 月革命』未來社．ジョレス・メドヴェージェフ著／佐々木洋訳（1995）『ソヴィエト農業；1917－1991』北海道大学図書刊行会

17）Roy Medvedev (1977), *Problems into the Literary Biography of Mikhail Sholokhov*, CUP., Sergei Starikov & Roy Medvedev (1978), *Philip Mironov and the Russian Civil War*, Alfred A. Knoph.『回想 1925－2010』73-74，85 頁．

18）『回想 1925－2010』30 頁．

19）中野徹三（2012）「メドヴェージェフ兄弟初の人間的記録として」『労働運動研究』復刊第 30 号，23-30.（2012.12）．

20）『回想 1925－2010』30 頁．

21）Zhores Medvedev (1976), “Two Decades of Dissidence,” *New Scientist*, vol.72, no.1025, Zhores Medvedev (1979), *Nuclear Disaster in the Urals*, Norton, pp.4-5, 7-8. ジョレス・メドヴェージェフ著／梅林宏道訳（1982）『ウラルの核惨事』技術と人間，10-11 頁．

22）Zhores Medvedev (1978), *Soviet Science*, Norton, pp.34-35, 49-51. ジョレス・メドヴェージェフ著／熊井譲治訳（1980）『ソ連における科学と政治』みすず書房，32-33，47-49 頁．

23）op.cit., pp.95-96, 100-102.同上，93，98-99 頁．

24）ジョレスは，上司のティモフェーエフ－レゾフスキーの生きざまについて，いわゆる『メドヴェージェフ・ペーパーズ』の第一部で詳しく紹介している．Zhores Medvedev (1970), *The Medvedev Papers; the Plight*

NII-Electronic Library Service

Fuji Women's University

of Soviet Science Today, St. Martin's, pp.70-112. ジョレス・メドヴェージェフ著／金光不二夫訳（1972）『ソビエト科学と自由』タイム・ライフ・ブック，73-112 頁．ジョレスの上司への弔辞も参照されたい．Zhores Medvedev (1982), 'Nikolai Wlddimirovich Timofeeff-Ressovsky (1900-1981),' *Genetics*, vol.100, 1. (1-5).

25）『回想 1925－2010』77-78 頁．

26）同上，96，98-99 頁．

27）同上，200-202 頁．

28）同上，84，92 頁．

29）Zhores, *Soviet Science*, pp.92-93. ジョレス『ソ連における科学と政治』90 頁．

30）op.cit., pp.100-103. 同上，98-99 頁．

31）op.cit., pp.93, 95, 101. 同上，91，93，99 頁．

32）op.cit., pp.101-102. 同上，99-100 頁．

33）Zhores, *The Medvedev Papers*, 99. pp.7-20. ジョレス『ソビエト科学と自由』13-27 頁．

34）Zhores Medvedev (1990), *The Legacy of Chernobyl*, Norton, pp.274-276. ジョレス・メドヴェージェフ著／吉本普一郎訳『チェルノブイリの遺産』みすず書房，303-304 頁．

35）東京電力福島原子力発電所事故調査委員会（2012）『国会事故調　報告書』徳間書店，５頁．

36）吉岡斉『新版　原子力の社会史』398 頁．

37）Жорез & Рой, *Неизвестый Сталин*, cc.226-234., Zhores & Roy, *Unknown Stalin*, L.B. Tauris, pp. 167-173., ジョレス＆ロイ『知られざるスターリン』208-215 頁．

38）中川保雄（2011）『増補　放射線被曝の歴史』明石書店 225-226 頁．故中川氏には，中川慶子さんとの優れた共訳書（1983）レスリー・フリーマン原著『核の目撃者たち ── 内部からの原子力批判』筑摩書房，もある．被曝の歴史と現状については，藤岡毅（2012）「放射線リスク論の転換は起こるのか ── ICRP の歴史と ECRR 勧告 ──」日本科学史学会生物学史分科会編『生物学研究』No.87．　63-79（2012.9）も参照されたい．

NII-Electronic Library Service